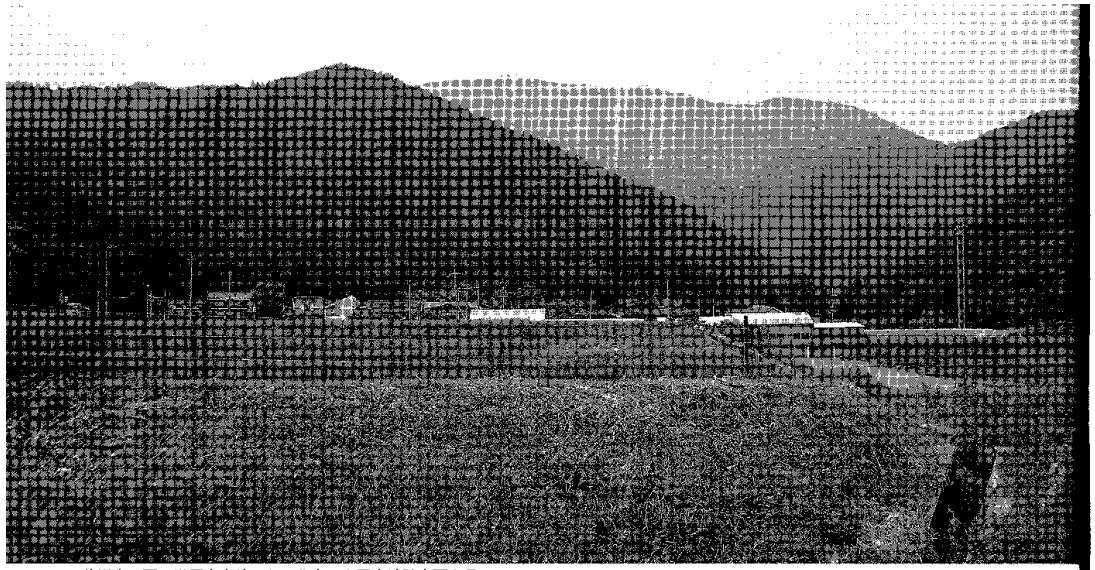
北国脇往還をゆく

湖北にトライアングルを描くように通る北国街道、中山道、そして北国脇往還。その三角形のなかでクロスするのは、長浜街道、小谷道、と呼ばれた道。街道は、人やモノを運び、文化の種を播き、育ててきた。



▲藤川宿の西、米原市寺林から、北方の上平寺城趾方面を見る

北国脇往還の歴史と経路

太田 浩司　長浜市長浜城歴史博物館 学芸員

「脇往還」の名は明治から

北国脇往還という名前は、「北国街道」の「脇往還」、つまり長浜の市街地を通る「北国街道」の「脇道」という意味である。しかし、この「脇往還」という屈辱的な名前が、この街道についたのは、そう古い話ではない。私が知る限りでは、明治20年代の後半に発刊された陸軍参謀本部陸地測量部作成「二万一地形図」に、「北国脇往還」の名が見えるのが初見である。

明治初年までは、湖北でもこの街道は「北国海道」と呼ばれるのが普通であった。それは、北国脇往還沿いの宿場に残る、伊部本陣肥田家、藤川本陣林家に残る古文書でも確認できるが、越前国福井藩の「松平文庫」に残る『東山道記』にも、関ヶ原の項に「八幡社右に有、此鳥居の内より北国海道也」とある（当時の街道の「街」は、「海」を使用するのが通常であった）。長浜の都市としての発展が進むなか、その町を貫通する街道のみが「北国街道」と呼ばれ、都市を宿場として持たない関ヶ原～木之本間の街道は、近代化の波の中で「脇」役に追いやられてしまったのである。

浅井氏と脇往還

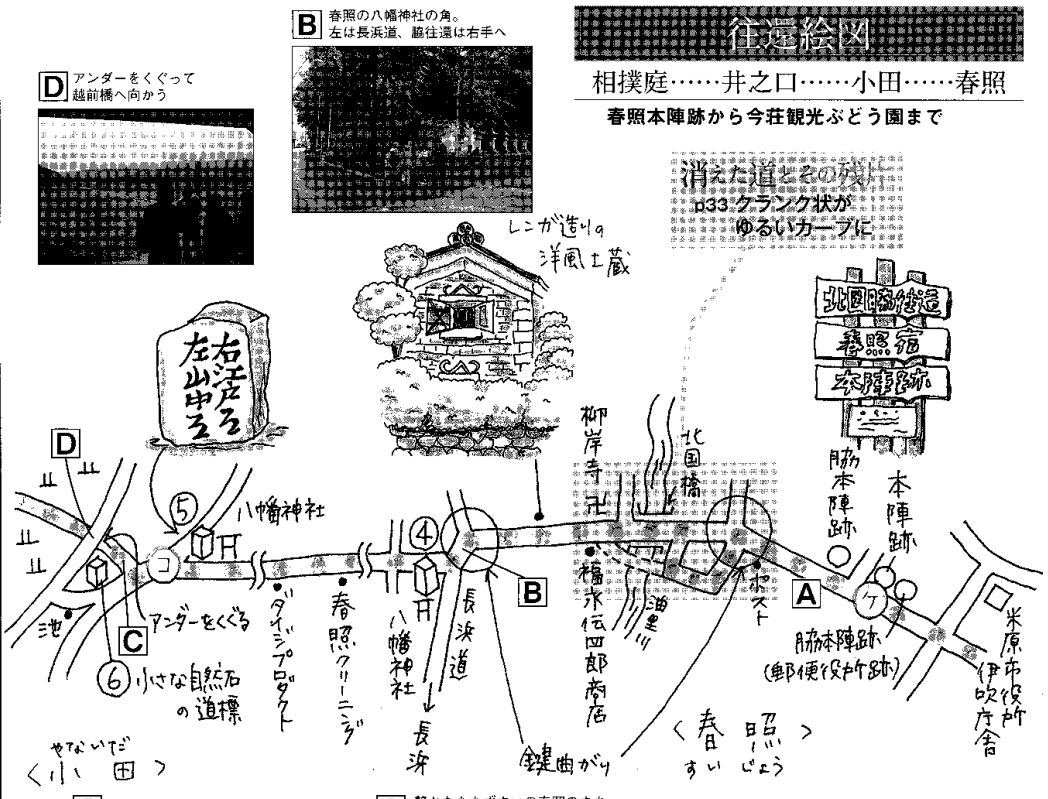
この北国脇往還は、戦国時代に重要な役割を果たす。湖北の戦国時代は、その守護家である京極氏の内紛が始まる文明２年（１４７０）に端を発し、浅井長政が切腹して浅井氏が滅亡した天正元年（１５７３）に終わると考えることができよう。戦国時代の前半、この地域を支配したのは守護家の京極高清で、その本拠は上平寺城（米原市上平寺所在）であった。上平寺城の城下町は、北

往還絵図

相撲庭……井之口……小田……春照

春照本陣跡から今荘観光ぶどう園まで

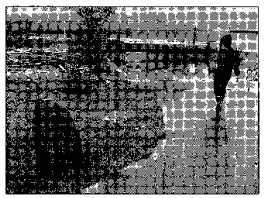
消えた道とその跡!
p33 クランク状がゆるいカーブに



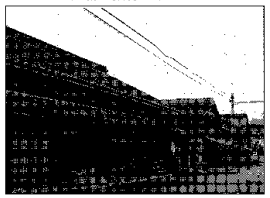
B 春照の八幡神社の角。左は長浜道、脇往還は右手へ

D アンダーをくぐって越前橋へ向かう

C 自然石の道標が道案内



A 静かなたたずまいの春照のまち。この建物は銀行だった



凡例
- 明治時代の地図をもとに取材班が歩いた経路
- 別説の経路
- 今はなくなった街道の跡
- 公共の建造物
- 歴史的な目標物
- お地蔵さん
- 道標(数字はp40「道標ギャラリー」の番号)
- 道標以外の石柱・石碑など
- 距離を測ったポイント

宿場町の面影が残るまちなみ

春照(すいじょう)の本陣跡前は、瓢箪屋(ひょうたんや)さんという旅館。まちのあちこちには宿場の面影が残る**A**。街道はメイン道路をまっすぐ行かず、「鍵曲がり」になった郵便ポストの角を左折する。すぐにまた右折すると、その先に見えるのは油(あぶら)川。昔はここに橋がかかり、街道はそのまま福永伝四郎商店前へと続いていたが、今ではすぐ右手に新しい橋が架けられている。

赤いレンガの土蔵が建ち静かなたたずまいを見せるまちの中心部を抜けると、太鼓祭りでも有名な春照の八幡神社。角に立つ道標が「左ながはま　右きのもと　えちぜん」と教えてくれる**B**。

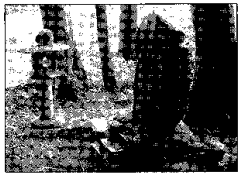
自然石の道標が二つ

ここからお隣の小田(やないだ)集落までは民家もまばらで、単調な道が続く。やがて右手に見える小田の八幡神社の角に小さな道標が。勢いよく流れる灌漑用水路を渡ったところで、三叉路を左折。見過ごしてしまいそうな自然石の道標の「右北國道」の表示を頼りにまたすぐ右折して**C**。県道のアンダーをくぐる**D**。ここからは田んぼの中のまっすぐな道だ。

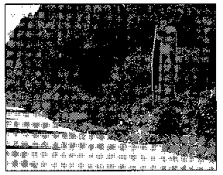
幻の越前橋

圃場整備された田んぼの中を進むと、姉川の堤防に突き当たる。昔はこのまままっすぐ姉川を渡る小田橋、通称「越前橋」が架かっていた。橋脚と朽ちた橋げたは今でも残っていて物悲しい風情を醸し出している。

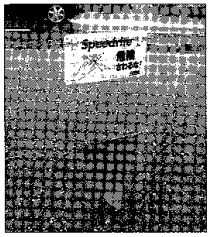
H 木陰に梵字の石標。弘法大師が水を掘り当てたと伝わる



G 「ポイ捨てあカン!」の看板のところから山の中へ

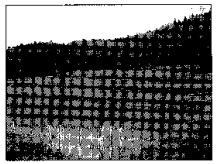


F 危険! 水田の周囲には電柵が張り巡らされている



消えた道とその跡!
p33 川のながに数本の橋桁

I ひととき視界が開ける「山田干軒跡」

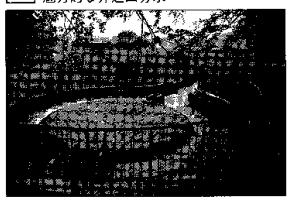


K 夏はブドウ狩りでにぎわう「今荘ぶどう園」

J

七尾山へ向かう林道と、集落に降りる分かれ道が次々現れるが、迷わずまっすぐ行くのがよい

E 水を公平に分配するための丸い造形が魅力的な井之口分水



やむなく堤防で左折し下流方向へ迂回する。しばらく進むと左手の堤防下に、灌漑用水を下流に公平に分配するために作られたという珍しい円形の分水工**E**を見ることができる。

井之口橋を渡って右折、堤防を通って越前橋の反対側まで戻ると、赤ちゃんを抱いたお地蔵さんが祀られている。その角で左折し再び街道へと戻る。道なりにちょっとした坂を登り切ると田んぼが現れる。周囲には獣除けの電柵が**F**! 感電しないように注意しながら広域農道へ出る。

怪しい森を抜ける

広域農道を400mほど進み、「ポイ捨てあカン!」の看板のところ**G**から街道は山の中へと延びている。小さな川を渡ると、すぐに米原市(旧伊吹町)と長浜市(旧浅井町)との境界だ。薄暗い森の中を行くと右手に現れる梵字の石標**H**が、この道がただの林道ではなく、街道であったことを物語っている。

ひととき視界が開けるのは山田干軒跡**I**。かつては多くの家があって、旅人の休息所として賑わったそうだ。

今荘観光ぶどう園

怪しげな森の道をさらに進むと、左右にいくつか分かれ道が現れるが、まっすぐ進む**J**。われわれはちょっと迷ってしまったので注意!

やがて右手にブドウ畑が見えてくると、そこは、夏、ブドウ狩りの人たちでにぎわう「今荘観光ぶどう園」である**K**。

(みわ)